有島記念館館報　VOL.14

有島記念館

題字は有島武郎令弟・里見弴(作家)の揮毫

ARISHIMA TAKEO MEMORIAL MUSEUM

もくじ

❶ 平成26年度の話題
❷ 平成26年度活動報告
❻ 平成26年度資料収蔵報告
❼ 学芸部門活動報告
ニュース
❽ 事務室だより
職員動向

平成二十六年度の話題

「夕張市美術館コレクション展 炭都・夕張の美術遺産」展の開催

二〇一二（平成二十四）年二月に積雪により屋根が崩落し、閉館した夕張市立美術館。有島記念館では、同館に所蔵されていた作品群を展示する企画展「夕張市美術館コレクション展　炭都・夕張の美術遺産」を開催しました。

夕張から産出された石炭は、明治期から高度経済成長期に至るまで全国の鉄鋼所や発電所などに供されて、日本の工業発展を根本から支えつづけました。このように日本の産業を支え続けた炭都・夕張の往時を伝える作品群は、夕張市の文化遺産にとどまらず、広く知られるべきものでもあります。

ニセコ町は、大正期より製紙工場などへ電力を供給する水力発電所が三箇所立地しており、夕張とはエネルギー産出地という共通項を持っています。また近年、ニセコ町は地中熱の利用など、地域におけるエネルギー循環政策をとり、エネルギーのあり方について強い関心を抱いている地域でもあります。

当館が顕彰する作家・有島武郎は、ニセコの地に「相互扶助」の理念を遺して世を去りました。夕張市美術館の閉館によって、その収蔵作品は展覧の機会を失いました。その作品群を広く紹介することは、文化施設同士の助け合いであり、有島の「相互扶助」思想の体現でもあります。

一八八八（明治二十一）年、シホロカベツ川が削った深い谷あいの森林地帯に、石炭層が発見されます。その発見によって、わずか数年の間に狭隘な谷底には炭鉱施設が建設され、それを臨む谷の斜面には炭鉱住宅がひしめき合い、炭鉱街が形成されました。人口の増加とともに、炭鉱労働者を中心として文化・芸術活動も盛り上がりをみせます。美術活動においては、一九三〇（昭和五）年に「夕張美術協会」が結成。戦後も炭鉱労働組合のサークル活動から美術グループが生まれ、活発な活動を行いました。

一九七九（昭和五十四）年、このような夕張の美術活動ゆかりの作家の作品の収集・公開、また発表の場を提供するために、夕張市立美術館は開設されました。しかし、二〇一二（平成二十四）年二月に積雪により屋根が崩落。その二年前の夕張市の財政破綻の影響もあり、残念ながら閉館に至ります。幸いにして作品に損傷はなく、夕張市内施設に現在も保管されています。

本展では、夕張市美術館収蔵作品から炭鉱の風景を多く描いた小林政雄や畠山哲雄などの作品をはじめ、有島武郎にゆかりのある武者小路実篤や、夕張や北海道にゆかりのある作家の油彩、水彩、書、立体作品など五十点を紹介しました。

この企画展の開催にあたり、夕張市教育委員会をはじめ、多くの方々にご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

「荒川好夫写真展　北海道　冬 ～蒸気機関車C62栄光の記録～」の開催

当館では、町内唯一の博物館施設として地域に残された産業遺産などの保存にも力を入れています。平成二十五年度からは、鉄道遺産である「旧新得機関区転車台」の整備を開始しました。今年度も継続して整備に当たるとともに、鉄道遺産を広く知っていただくための取り組みも行いました。それは、企画展「荒川好夫写真展　北海道　冬　～蒸気機関車C62栄光の記録」とその関連事業です。

荒川好夫氏は、一九四六（昭和二十一）年に東京に生まれ、東京写真短期大学（現・東京工芸大学）卒業後の一九六八（昭和四十三）年からは、日本国有鉄道（国鉄）本社広報部の専属カメラマンとして、国鉄の広報及び宣伝用写真撮影に従事しま

す。一九七一（昭和四十六）年には、鉄道写真ライブラリーとして有限会社レイルウエイズグラフィック（ＲＧＧ）を設立。日本を代表する鉄道写真家として、全国の鉄道風景を追いながら、現在に至ります。

荒川氏は、一九七一年、函館本線小樽―長万部間［通称・山線］を日本最大の蒸気機関車「Ｃ62形」が雪原を走る最後の姿を追い求め、北海道へと渡ります。そして、Ｃ62が重連（二両）がけん引する急行「ニセコ」を、小樽築港機関区の出区から、オタモイ、稲穂、倶知安、目名という急勾配・急曲線が連続する隘路を経て、長万部に至る道のりを走行する姿や、定時運行に全力を尽くす乗務員の姿などを記録していきました。本展では、この時撮影された五七点の作品を主に紹介しています。

荒川氏の視線は、本州連絡の重責を担う列車を定時運行させようと極寒の中で奮闘する鉄道職員、その一方で温かい車内でくつろぐ乗客、そして、白い雪原を驀進するＣ62重連がけん引する急行「ニセコ」を重層的に捉えています。これらの作品は、単なる鉄道車両を撮影した作品群ではなく、急行「ニセコ」を巡る１つのドキュメンタリーとして、見る者を魅了します。また、そこには失われた鉄道や生活風景が存在し、当時の時代の匂いを感じさせる貴重な記録ともなっています。

このほか、本展では、荒川氏が撮影した一九七一年当時のニセコ駅周辺の記録写真も合わせて紹介しました。特に、ニセコ駅待合室を撮影した作品を観たニセコ町在住の来場者には、知人の若き日の姿を発見するなど、時を越えた出会いがいくつもありました。

関連事業では、転車台と殖民軌道真狩線跡とそこに繁茂した植物を観察する見学会を九月十四日に開催しました。転車台見学会を前にして、荒川氏、持田誠氏（帯広百年記念館学芸調査員）、市野揚子氏（交通新聞社）が整備に取り組み、一九九五（平成七）年以来の転車台の動態復元に成功しています。そして見学会の際、来場者を転車台に載せて回転させると大きな歓声があがりました。それに続く殖民軌道跡を巡るツアーでは、持田氏の解説によって、殖民軌道の役割や普段は「雑草」とひとくくりにされている植物にも名前があることなどが解説されました。

この企画展の開催にあたり、荒川好夫氏をはじめ、多くの方々にご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成二十六年度活動報告

一、展示事業

（一）常設展示室

来場者数

八、二〇〇人

［平成二十六年四月一日～平成二十七年三月三十一日］

（二）特別展示室

あべ弘士原画展

期間　平成二十六年四月二十六日～六月三十日

来場者数　一、九八七人

夕張市美術館コレクション展

炭都・夕張の美術遺産　ニセコ展

期間　平成二十六年七月十二日～九月七日

来場者数　二、二九三人

荒川好夫写真展　北海道　冬

～蒸気機関車Ｃ62栄光の記録～

期間　平成二十六年九月十二日～平成二十七年二月二十二日

来場者数　三、二二一人

※十月十六日～十一月三十日の間は、小ギャラリーにて開催

第二十六回有島武郎青少年公募絵画展

期間　平成二十六年十月三十一日～十一月十六日

来場者数　五三二人

応募点数　三三〇点

入賞・入選点数　一〇二点

有島武郎賞

「夕空の牛」福田真子

（北海道札幌南高等学校一年）

有島武郎賞「夕空の牛」福田真子

有島記念館若手作家展Ⅱ

―Shiribeshi―

新見亜矢子作品展　山下隆博写真展

―吹雪の日／凪の海―

期間　平成二十七年三月二十一日～六月七日

来場人数　一七四人

（三月三十一日まで）

（三）常設展示室内小部屋（二階）

しりべしミュージアムロード共同展

「百科事典」人物事典

期間　平成二十六年七月十七日～八月二十四日

来場者数　一、四〇四人

（四）小ギャラリー

有島記念館若手作家展Ⅲ

平成の「生れ出づる悩み」２０１４展

期間　平成二十七年三月二十一日～六月七日

来場人数　一七四人

（三月三十一日まで）

展示事業来場者（延べ人数）：一七、九八五人

（五）展示協力

藤倉英幸室蘭特別展

静かな風を聴きながら

期間　平成二十六年四月一日～五月六日

会場　室蘭市民美術館

企画展　シリーズ北を描く２０１４

藤倉英幸展　静かな風を聴きながら

期間　平成二十六年八月二日～八月三十一日

会場　網走市立美術館

特別展　藤倉英幸　貼り絵の世界

北の風景に想いをよせて

期間　平成二十六年十二月十三日～平成二十七年二月一日

会場　滝川市美術自然史館

平成の「生れ出づる悩み」２０１４展

岩内展

期間　平成二十六年十一月八日～十二月七日

会場　木田金次郎美術館

二、普及事業

※敬称略

第十二回星座忌（共催事業）

日時　平成二十六年六月七日　十三時開始

参加者　七十三人

主催　土の香の会

星座忌コンサート

「札幌コダーイ合唱団コンサート」

日時　平成二十六年六月七日　十三時四十分開始

指揮者　中村隆夫（北海道教育大学名誉教授）

出演　札幌コダーイ合唱団

参加者　七十三名

チェンバロと朗読のコンサート

日時　平成二十六年六月十四日　十四時開始

出演　明楽みゆき（チェンバロ奏者）、当館職員

参加者　二十八名

あべ弘士講演会

日時　平成二十六年六月十九日　十八時開始
講師　あべ弘士（絵本作家）
参加者　四十一名

野瀬栄進ジャズピアノコンサート

日時　平成二十六年七月十二日　十八時開始
出演　野瀬栄進（ジャズ・ピアニスト）
参加者　一二六名

旧新得機関区転車台見学会

日時　平成二十六年七月十三日　十三時開始
場所　ニセコ駅構内転車台周辺
講師　伊藤大介（当館主任学芸員）
参加者　二名

夕張市美術館コレクション展　ギャラリートーク

日時　平成二十六年七月十九日　十三時開始
講師　上木和正（元夕張市美術館館長）、伊藤大介（当館主任学芸員）
参加者　十六名

日時　平成二十六年八月九日　十三時開始
講師　伊藤大介（当館主任学芸員）
参加者　十九名

車いすで絵を描こう～車いす体験とドローイングワークショップ～

日時　平成二十六年八月二十三日　十四時開始
講師　伊藤恵里（美術家）
参加者　四十名

能登谷安紀子ヴァイオリンリサイタル

日時　平成二十六年九月六日　十四時開始
出演　能登谷安紀子（ヴァイオリニスト）、友清祐子（ピアニスト）
参加者　八十九名

荒川好夫講演会「回想・函館山線」

日時　平成二十六年九月十三日　十四時開始
講師　荒川好夫（鉄道写真家）
参加者　四十一名

転車台・殖民軌道跡　植物観察ウォーク

日時　平成二十六年九月十四日　十三時開始
場所　ニセコ駅構内転車台周辺
講師　持田誠（帯広百年記念館学芸調査員）、伊藤大介（当館主任学芸員）
参加者　十三名

荒川好夫写真展　ギャラリートーク

日時　平成二十六年九月二十日　十三時開始
講師　伊藤大介（当館主任学芸員）
参加者　十三名

第二十六回有島武郎青少年公募絵画展表彰式

日時　平成二十六年十一月二日　十三時開始
講評　西村明美（道展会員）
参加者　一八二名

旧新得機関区転車台見学会

日時　平成二十六年十一月三日　十三時開始
場所　ニセコ駅構内転車台周辺
講師　伊藤大介（当館主任学芸員）
参加者　二十五名

朗読と音楽の調べ

日時　平成二十七年二月二十一日　十四時開始
出演　田村英一（フリーアナウンサー）、佐藤洋一（ギタリスト）
参加者　六十五名

第十五回宮山登山会

日時　平成二十七年三月二十一日　九時三十分開始
場所　有島記念公園及び宮山周辺
参加者　十二名

土田英順・東日本大震災チャリティーコンサート

日時　平成二十七年三月二十一日　十三時開始
出演　土田英順（チェリスト）、鳥居はゆき（ピアニスト）
参加者　七十五名

新見亜矢子・山下隆博ギャラリートーク

日時　平成二十七年三月二十二日　十三時開始
出演　新見亜矢子（画家）、山下隆博（写真家）
参加者　十二名

新見亜矢子氏

山下隆博氏

普及事業参加者（延べ人数）：九四五人

三、マスコミへの露出

（一）新聞報道

○「年問券で有島記念館へ　今月導入　通常料金値下げも」
平成二十六年四月五日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「動物生き生き　絵本原画二十九点」
平成二十六年五月九日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「岩内、ニセコ　七月から作品展　夕張の記憶伝えたい　木田美術館、有島記念館　旧美術館収蔵絵画など無償貸し出し」
平成二十六年五月十七日北海道新聞朝刊［空知］

○「旧夕張市美術館の収蔵品　岩内、ニセコで特別展」
平成二十六年五月二十三日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「〈これいいね！〉有島記念館特製絵はがき　羊蹄山　貼り絵で彩り豊か」
平成二十六年五月三十日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「七日星座忌コンサート」
平成二十六年六月三日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「〈そらち日誌〉夕張の宝物　もっと人目に」
平成二十六年六月七日北海道新聞朝刊［空知］

○「〈三面鏡〉納豆食べたゾウは？」
平成二十六年六月二十一日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「後志五館　共同企画展」北海道新聞夕刊
平成二十六年七月三日北海道新聞夕刊［全道］

○「12日ジャズピアノコンサート」
平成二十六年七月十日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「アート味わい歴史学ぶ　炭都のにぎわい今に　有島記念館で「夕張展」」
平成二十六年七月十三日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「管内五館「五巻の百科事典」にしりべしミュージアムロード共同展」
平成二十六年七月十六日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「「近代化」たどる作品群　夕張市美術館所蔵品　有島記念館で展覧会」
平成二十六年八月五日北海道新聞夕刊［全道］

○「車いすで描こう　巨大絵」
平成二十六年八月二十日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「車いすで大作アート　障害者への理解へ催し」
平成二十六年八月二十四日北海道新聞朝刊［道央］

○「ニセコでバイオリンリサイタル」
平成二十六年九月四日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「SLの勇姿見て　荒川さんが写真展」
平成二十六年九月十三日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「鉄道遺産の価値　再発見　転車台を見学　ニセコでツアー」
平成二十六年九月十五日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○わが館自慢の一品「黒百合会の学生たち」
平成二十六年九月十六日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「雪原疾走　C62の勇姿　ニセコ　鉄道写真家・荒川さん展示」
平成二十六年九月十七日讀賣新聞［小樽・後志］

○「最高賞に福田さん　ニセコ・有島少年絵画展」
平成二十六年十月二十九日北海道新聞朝刊［全道］

○「ニセコの産業遺産　学ぼう」
平成二十六年十一月二日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「有島武郎絵画展　福田さんら表彰」
平成二十六年十一月四日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「静かに問いかける原発　岩内出身・山下隆博さん写真集」
平成二十七年二月二日北海道新聞朝刊［全道］

○「朗読と音楽に親しむ集い」
平成二十七年二月十八日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「米国詩人の作品翻訳　有島自筆稿2件目収蔵」
平成二十七年二月二十一日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「慈善コンサート」
平成二十七年三月二十日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「画家新見さん、写真家山下さん若手作家が自作解説」
平成二十七年三月二十三日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○「有島記念館で若手の展覧会」
平成二十七年三月二十六日北海道新聞夕刊［全道］

（二）その他

○「広報ニセコ」連載「こんにちは有島記念館です」
平成二十六年四、七、九、平成二十七年一月号

○「新・北の美63　有島武郎　羅馬古城壁」
平成二十六年七月、『季刊Ｈｏｐｐｏｋｅｎ』一七六号、北海道国際交流・協力総合センター

○コミュニティサイト・北海道ＬＩＫＥＲＳ「ニセコ町に有島記念館を訪ねて」
平成二十六年七月三十一日

○テレビ番組「イチオシ！」北海道テレビ
平成二十七年三月二十四日放送

○毎月第2、第4水曜日「有島記念館の時間」ラジオニセコ　ほか

平成二十六年度資料収蔵報告

（一）寄　贈

○佐野力様（東京都）より
ＤＶＤ「清き國ぞとあこがれぬ」一点

この他、全国の文学館、美術館をはじめとする博物館施設や個人から、図録、年報、歌集など多くの資料寄贈を受けました。紙幅の都合上、本欄では割愛致しますが、厚く御礼申し上げます。

（二）購　入

○有島武郎自筆原稿
「ホイットマン『神』」

※詳しくは、後述の「学芸部門活動報告」を参照してください。

○「狩太町町勢要覧　昭和二十七年版」

以上の寄贈・購入資料については、適切な保存処理や資料自体の調査終了後、閲覧・公開に供します（一部、プライバシーに関わる資料に関しては、この限りではありません）。一部資料の詳細は、次号以降の館報「収蔵資料紹介」欄にて紹介する予定です。

学芸部門活動報告

○**有島武郎自筆原稿「神」を収蔵しました**

これは、有島武郎がアメリカの詩人・ウォルト・ホイットマンの詩「Gods」を翻訳し、一九二一（大正十）年一月二日発行の『大阪時事新報』に「神」として掲載された作品の原稿です。

武郎はアメリカ留学中にホイットマンの詩と出会い、その生き様に強い影響を受けました。帰国後には、ホイットマンの詩を翻訳し、『ホキットマン詩集』（全二集・叢文閣）として出版するほか、ホイットマンに関する講演なども行っています。

この「神」は、『大阪時事新報』に掲載された後、筆が加えられて、同年十一月十一日に、札幌農学校以来の親友である足助素一が経営する叢文閣より発行された『ホキットマン詩集　第一輯』にも掲載されます。

原稿用紙は、武郎が愛用していた東京・文房堂製の五百字詰め原稿用紙二枚を使用しています。筆記具は、黒色のインクを使用した万年筆です。大阪時事新報社宛の封筒も付随しており、消印は東京・麹町局で、大正九年十二月二十四日となっています。

有島武郎自筆原稿「神」

○**収蔵資料のデジタル化作業をはじめました**

今年度から、有島武郎関連の書簡をはじめ、有島農場関連資料のデジタル化作業を開始しました。当面は内部利用に留まりますが、将来的には、一部館蔵資料のホームページ上での公開などが考えられます。

調査・研究活動については、平成二十六年度までに受贈・購入した資料に関する調査、企画展実施に関する調査・研究などを実施しました。それらの成果のうち、論文等については以下の通りです（主任学芸員　伊藤大介）。

○**伊藤大介「新・北の美63　有島武郎羅馬古城壁」**

平成二十六年七月発行、『季刊Ｈｏｐｏｋｅｎ』一七六号

○**伊藤大介「〈わが館自慢の一品〉黒百合会の学生たち」**

平成二十六年九月十六日北海道新聞朝刊［小樽・後志］

○**伊藤大介「有島武郎原稿「神」及び書幅「爾自身を知れ」について」**

平成二十七年三月三十一日発行、全国文学館協議会紀要第８号

ニュース

○**リーフレットを刷新しました**

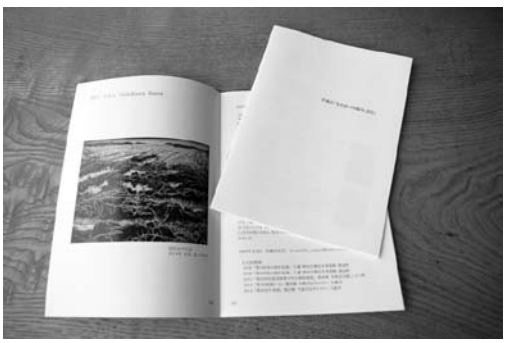
有島記念館のリーフレットを新たに二種類作成しました。一つは、来館者に配布するために、有島武郎の生涯やニセコとの関わりを詳しく紹介したものです。もう一つは、町内外の観光施設等で配布していただくためのもので、有島武郎の生涯をはじめ、有島記念館の館内や周辺の文学・歴史遺産なども紹介しています。

○**有島武郎青少年公募絵画展の審査体制が替わりました**

今年度から、有島武郎青少年公募絵画展の審査体制を従来の三名から四名体制にし、さらに審査員についても新たな方々をお迎えしております。審査委員長には佐藤友哉氏（札幌芸術の森美術館館長）に、審査員には佐藤光雄氏（全道展会員）、西村明美（道展会員）、羽山雅愉氏（全道展会員）に就任いただきました。

○**有島武郎青少年公募絵画展図録を発行しました**

第二十六回有島武郎青少年公募絵画展の入賞・入選作、審査員講評などを掲載した図録を作成しました。上位５賞と奨励賞については作品の図版を掲載しております。なお、公募絵画展入賞・入選者への副賞として制作・発行したため、本図録は一般向けには配布・販売は行っておりませんが、当館ホームページにて公開を考えております。



有島武郎青少年公募絵画展図録

○平成の「生れ出づる悩み」２０１４展の巡回

有島武郎の代表作「生れ出づる悩み」。この作品は、青年時代の木田金次郎が、自らの境遇や絵画制作を続けるか否かに悩んでいる時、偶然に札幌・豊平川畔の有島の住まいを見つけて、訪問したことがモデルとなった小説です。この出会いから百年目にあたる、二〇一〇年に『平成の「生れ出づる悩み」二〇一〇』コンテストが開催されました。その後、このコンテストは二〇一二年にも開催されて、今回が三回目の開催となります。

このコンテストの特徴は、作品自体の審査に加えて、若手芸術家が抱いている制作に対する考え、また制作や発表にまつわる悩みといったテキストも審査となっていることです。このことによって、優れた「作品」とともに、応援していきたい「若手芸術家」を選ぶコンテストともなっています。

今回も前回と同様に、五人の作家が入選しました。このほか、過去二回の入選者の近年の活動や作品も紹介するため、平成二十六年冬の岩内・木田金次郎美術館を皮切りに、平成二十七年三月から六月までは有島記念館、その後、道東、道北、道央の文化施設を巡回します。巡回会場では、数量限定で図録も配布します。

事務室だより

春を迎え、有島記念館へのアクセスについてのご相談を頂く機会も増える。鉄道でのご来町をお考えの方には、主に、二通りのルートをご提案している。ひとつは倶知安駅からのバスと徒歩、もうひとつはニセコ駅からの徒歩である。

倶知安からの経路は、初めて有島武郎がニセコ町（当時・狩太村）の農場を訪ねた時のそれに似る。二十三歳の彼は、馬車と馬とを乗継ぎ、訪れた。同じ日の日記には、懊悩が綴られた。今で言う大学を卒し、さまざまな心残りを背に、父に与えられる農場を通り、北海道を離れる旅路。明治三十四年七月午後二時、夏花おどる美しい土地は、その目にどう映ったろうか。

脚力に自信のある方には、ニセコ駅から「『親子』の坂」を経由する道をお勧めする。小説『親子』は武郎の自伝的作品とされる。冒頭、主人公の「彼」はこの道を、父と共に歩む。秋の日暮れ、彼は三十代の間際で、ごく抑えられた憤悶を抱えている。農場の在り様に対するその思いは、作中、一つの段落を得るが、そのときに彼が眺めたものは、雄大なニセコの自然だった。

どの道を辿っても、やがて目に入る有島記念館の姿は、建造物それのみではない。有島武郎が愛したこの大地と合する姿だ。武郎は、若き日、死後には後方羊蹄山の麓に眠りたいと言った。農場解放の果である「狩太共生農団」の人々によって、そしてニセコ町によって、ここに守られた記念館は、彼の望みを叶え続けている。

―皆様のご来館をお待ちしています。

（スタッフ・金沢志乃）

職員動向

平成二十六年度

▼採　用

主任学芸員
伊藤　大介［平成二十六年四月一日］

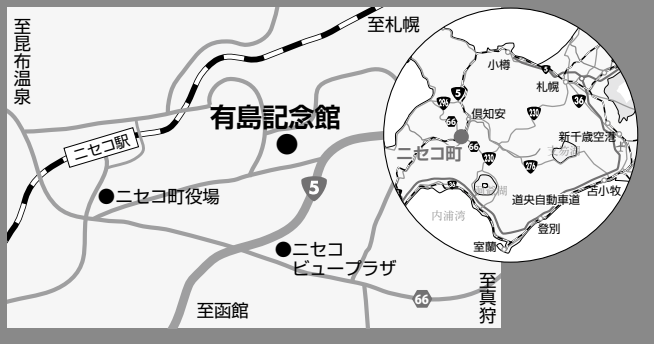
臨時職員
金沢　志乃［平成二十六年四月一日～平成二十七年三月三十一日］

臨時職員
荒川ひとみ［平成二十六年四月一日～五月二十二日］

臨時職員
徳保　由紀［平成二十六年五月一日～十一月三十日］

臨時職員
浅井　遥香［平成二十六年六月二十日～十一月三十日］

有島記念館
〒048-1531　北海道虻田郡ニセコ町字有島57番地
TEL　0136-44-3245　FAX　0136-55-8484
e-mail arishima@town.niseko.lg.jp
ホームページ　有島記念館　検索　ブログも日々更新中です

開館時間　9:00～17:00（入館は16:30まで）
休館日　毎週月曜日（５月から９月は無休）、年末年始
駐車場　自家用車用約30台・大型バス用約10台
常設展観覧料
一般500円、高校生100円
年間入館券（発行年度内有効）大人800円、高校生200円
20名以上の団体は400円。中学生以下とニセコ町在住の65歳以上は無料。

交通アクセス
自家用車　札幌、新千歳空港より自家用車で約2時間
JR　ニセコ駅より徒歩約30分(約2.5km.)、タクシー5分
バス　道南バス[倶知安駅発]「有島記念館前」下車徒歩5分